

〔講演記録〕 解説

木村 哲也（国立ハンセン病資料館）

はじめに

本稿は、別途掲載した鶴見俊輔（1922-2015）^{つる み しゅんすけ}による講演会「ハンセン病との出会いから」の解説である。講演は、2001年7月1日（日）、多磨全生園コミュニティセンターにて、高松宮記念ハンセン病資料館の開館8周年記念講演会として開催され、420人を超える観客で盛況であったことが伝えられている⁽¹⁾。

当館に音源が所蔵されていたが、これまで講演記録はどこにも発表された形跡がなく、今回文字起こしをし、初公開されるものである⁽²⁾。

鶴見は、戦後日本を代表する哲学者・評論家の1人である。プラグマティズムや記号論などアメリカ哲学の日本への紹介をはじめ、思想の科学研究会を主宰し雑誌『思想の科学』を発行するかたわら、転向研究に代表されるような共同研究を組織し、また日本の大衆文化の研究へと関心を広げる一方で、安保反対・ベトナム戦争反対の反戦運動を担い、晩年は九条の会呼びかけ人となるなど、93歳で生涯を閉じるまで幅広い活動をつづけた。

鶴見の仕事の中で、ハンセン病問題への関与もけっして無視できない一角を占めている。鶴見とハンセン病問題との関係については、当事者の証言をはじめ⁽³⁾、新たな研究もあらわれている⁽⁴⁾。

本講演記録では、鶴見が関係したコンスタンチン・トロチェフ、^{こだまゆうじ} 苺雄二、^{しまひろし} 島比呂志、^{しきいつま} 志樹逸馬、^{しまだひとし} 島田等といったハンセン病療養所入所者への言及が随所にみられる。鶴見が関係を持ったハンセン病入所者の多くは、詩人であった。

この講演記録を掲載する『研究紀要』は、2023年3月31日に発行され、おりしも当館企画展「ハ

ンセン病文学の新生面 『いのちの芽』の詩人たち」の会期（2023年2月4日～5月7日）と重なる。講演内容は、企画展の主題とも深く関わり、相互に響きあう内容となっている。

そこでこの機会に、鶴見とハンセン病療養所の詩人たちとの関係とその意義を広く知っていただくことを目的として、本講演記録を掲載する次第である。

以下、講演内容と関係のある事項を中心に、鶴見がハンセン病問題とどのように関わりを持ったのかを記し、解説に代えたい。

1. ハンセン病との出会い

鶴見俊輔がハンセン病と出会ったのは、講演でも述べているとおり、コンスタンチン・トロチェフ（1928-2006）というロシア人少年のハンセン病療養所（以下「療養所」と記す）への隔離の現場に立ち会ったことがきっかけである。鶴見は具体的な年を述べていないが、トロチェフの栗生楽泉園への入所は1946年5月である。しかし、この時は、偶然隔離の現場に居合わせたに過ぎない。

鶴見が本格的にこの問題に引き込まれるのは、詩人・^{おおえみつお} 大江満雄（1906-1991）との出会いがきっかけであった。大江は、1950年代から療養所の詩人たちと詩作を共にし、1991年に亡くなるまで、40年余にわたって療養所の詩人たちと親交をもった人物である。

鶴見が知り合った当時、大江は全国の療養所の詩人たちの合同詩集を計画中で、やがてそれは日本ライ・ニューエイジ詩集『いのちの芽』（三一書房、1953年）として出版された。鶴見は大江が

(1) 「資料館八周年記念講演／鶴見先生の話に感銘」（『資料館だより』第33号、2001年10月1日）2頁。本講演に関する活字となった記録は、この記事が現在確認できる唯一のものである。資料①も参照のこと。

(2) 資料ID：74547、74548。

(3) 木村聖哉、鶴見俊輔「『むすびの家』物語：ワークキャンプに賭けた青春群像」（岩波書店、1997年）、木村聖哉、湯浅進、黒川創『ハンセン病に向きあって：鶴見俊輔さんの仕事①』（編集グループSURE、2016年）。

(4) 宮下祥子「鶴見俊輔のハンセン病者との関わりにみる思想—1953～1964年を中心に—」（『同時代史研究』第10号、同時代史学会、2017年）20-36頁。

暮らしていた東京都豊島区東長崎の自宅を訪ね、出版前の詩の原稿の束を目にしたことを講演で語っている。

大江との関係はこの後も継続し、1991年に大江が亡くなると、葬儀の席上、鶴見がお別れの言葉を述べた。

大江の没後も、著作集出版を支援し、『大江満雄集 詩と評論』として、鶴見と関係の深かった思想の科学社から1996年に出版された。また、木村哲也編『癩者の憲章 大江満雄ハンセン病論集』（大月書店、2008年）の帯に推薦文を寄せてもいる。現在では半ば忘れられている大江の仕事の意義を評価し、世に伝え広める労を惜しまなかった。

2. 笹雄二との出会いから

鶴見俊輔は、大江満雄が編集した『いのちの芽』に言及するばかりでなく、同詩集に掲載された作品のいくつかを自ら朗読し、短評を加えるスタイルで講演を進行している。

笹雄二（1932-2014）の詩「鬼瓦よ」を読み上げ、「呪詛する勇氣。／その中に微かな純血性がある。」という詩句に注目して、次のように述べている。

「これはすごい詩だと思いましたね。／呪いの「呪詛」。その中にこもっている「純血」。やわな理想主義じゃないでしょ？ やわなヒューマニズムではないでしょ？ ここには、闘う意思の持続っていうものがあるんです。／これが、ハンセン病療養所の中に、90年、あきらめることなく、ずーっと保たれていた感情のかたちですね」。

純粹なものよりも雑多なものが生み出す可能性を見てきた鶴見ならではの指摘がここにはある。

笹は、1939年多磨全生園入所。1951年栗生楽泉園に転園。詩集『鬼の顔』（昭森社、1962年）、『ライは長い旅だから』（趙根在^{チウケンジェ}との共著。皓星社、1981年）の2冊の詩集のほか、評論集や児童向けの作品も上梓した。らい予防法違憲国家賠償請求訴訟の東日本原告団の代表、のち全国原告団の代表を務めた。

鶴見は笹雄二との個人的な関係には言及してい

ないが、実際にはけっして浅くはないつながりがあった。

大江の発案で、栗生楽泉園に「教養大学講座」が開かれたとき、鶴見はその講師として同園を訪れている。1954年7月15日「庶民の哲学」、同年9月24日「マス・コミュニケーションについて」と題する講義をし、笹雄二ら栗生楽泉園の入所者たちと親交をもった⁽⁵⁾。

大江は、インドの詩人タゴールが、民族や宗教、階級の対立を超える学習の場として設立したタゴール国際大学にならい、入所者がさまざまな立場を超えて共に学ぶ場をつくろうと、栗生楽泉園に「教養大学講座」を設置することを構想し、実現した。

1953年3月26日に第1回講座が開講され、1958年10月28日の最後の講座まで、5年にわたり、じつに70回を超える息の長い活動が重ねられ、療養所で花開いた文化活動の中でも稀有な実践となった⁽⁶⁾。

3. コンスタンチン・トロチェフとの出会いから

栗生楽泉園には、鶴見俊輔がハンセン病問題と出会う最初のきっかけをつくったロシア人のコンスタンチン・トロチェフも入所していた。

鶴見は、1954年大江満雄と山室静^{やまむろしずか}とともに栗生楽泉園を初めて訪ねたおり、トロチェフと再会し、その時の模様を、エッセイ「山荘に生きる帝政ロシア 亡命貴族三代記」（『太陽』第1巻第3号、平凡社、1963年9月）に綴っている。

トロチェフとの個人的な親交はつづき、やがてハンセン病回復者のための宿泊施設「交流の家」^{むすび}（以下、「」を外して交流の家と記す）の建設運動へとつながる経緯は、講演でもふれられているとおりである。

交流の家は、1963年ハンセン病回復者のトロチェフが都内の宿泊施設の利用を拒否されたことを鶴見から聞かされたフレンズ国際労働キャンプ（FIWC）関西委員会のメンバーが呼びかけ、大

(5) 宮下祥子「鶴見俊輔・ハンセン病関連年表」（『同時代史研究』第10号、同時代史学会、2017年）35頁。

(6) 教養大学講座については、栗生楽泉園患者自治会編『風雪の紋：栗生楽泉園患者50年史』（栗生楽泉園患者自治会、1982年）385-386頁に、開講年月日、講師名、テーマの一覧が掲載されている。

倭紫陽花邑から土地の提供を受けて建設運動を進め、1967年に竣工した。現在も、特定非営利活動法人むすびの家として活動を続けている。

建設運動のさなか、地域住民の反対にあった時、学生たちが建設途中のブロックをすべて住民の见ている前で壊してしまい、いったん白紙に戻してから、一人ひとりが地域に入って住民への説得をつづけ、空気が変わる機会をとらえて一気呵成に竣工を実現する動きを指して、「戦後の学生運動の中では珍しいやり方です」「驚くべき知恵ですよ」という評価をしている。党派や原理原則に拘泥して一般社会から遊離することもしばしばだった旧来の学生運動と異なる運動論がそこにあったと指摘している。

鶴見は、サークル論や運動論をさまざまなかたちで展開した思想家だが、それらを裏打ちしていた経験のひとつは、「いったん引いて形勢を整える」という交流の家建設運動から得られたものであった。ハンセン病問題との出会いによる思索の成果として注目をうながしておきたい。

トロチェフは、ロシア語、フランス語、英語、日本語の四か国語を話し、日本語で詩を書いた。『いのちの芽』への参加はなかったが、第一詩集『ぼくのロシア』（昭森社、1967年）は、大江の支援で出版され、解説も大江が書いている。

第二詩集『うたのあしあと』（土曜美術社出版販売、1998年）には、鶴見俊輔の解説が収録された。解説で鶴見は「これは、ひとりの世界詩人の詩集であり、ここにあるのは、未来の日本語だ」と、トロチェフの詩を評価する⁽⁷⁾。

本講演では、第二詩集から「雪だるま」が朗読され、コンラッドを引き合いに出して、「母語ではない日本語でつづられた世界文学」との趣旨で同じことを述べている。

日本のハンセン病文学を、このような角度から論じた例は他にはなく、世界文学として評価を試みようとするものであり、鶴見の着眼のユニークさを知ることができる。

4. 島比呂志との出会いから

島比呂志（1918-2003）も、ハンセン病文学と患者運動の双方に大きな足跡を残した人物である。

島は、1942年大島青松園入所。1年で退所。1947年再入所。翌年星塚敬愛園に転園。『いのちの芽』に参加。文芸同人誌『火山地帯』主宰。小説・評論を中心に著書は10冊を超える。らい予防法違憲国家賠償請求訴訟（以下、「国賠訴訟」と記す）の最初の原告13人のうちの1人。1999年社会復帰。生前に詩集はなかったが、死後、立石富生^{たていしとみ}編『凝視』（火山地帯社、2003年）、立石富生^お編『現代のヨブに』（火山地帯社、2019年）が編まれた。

鶴見俊輔は、講演の中で『いのちの芽』に収録された島の詩「ふるさとの家进行」を朗読し、次のように述べている。

「これは51年前に書かれた詩ですが、現在の状況をしっかりとらえているじゃないですか。いま我々の前にある状況って、こういうものなんですよ。／後遺症が残っている。言葉の発音なども含めて。それをどういふふうに迎えるところが、この日本にあるのか。そのふるさとは、どこにあるのか。〔元〕患者そのものの家の中に用意しつづけるのか、ないのか。いまの問題なんですね。その時、詩の持つ射程って非常に広いでしょう」。

講演が行われたのは、ハンセン病回復者が原告となった国賠訴訟の判決確定直後の高揚感の中でのことであったが、ハンセン病回復者の家族が原告となったハンセン病家族国家賠償請求訴訟（以下、「家族訴訟」と記す）の判決で国が敗訴し謝罪・賠償に応じるようになるのは、時代がくだって2019年まで待たねばならなかった。鶴見がここで指摘しているのは、まさに病家族訴訟で焦点化した問題そのものであり、患者・元患者ならびにその家族と、一般社会の関係を問う、島の詩が照らし出す射程の広さであった。

鶴見は、島の最初期の詩文集『生きてあれば』（大日本雄弁会講談社、1957年）に解説「島比呂志の世界」を寄せている。鶴見はそこで、「ハンセン

(7) 鶴見俊輔「この時代の井戸の底に」（コンスタンチン・トロチェフ『うたのあしあと』土曜美術社出版販売、1998年）82頁。

病療養所もまた、日本の最も深い場所の一つであり、ここから送りとどけられたメッセージは、日本の文化と本格的にとりくもうと思う者にとって、ハンセン病者固有の問題を越えて、普遍的な意味をもつ」と論じた⁽⁸⁾。

島によれば、『生きてあれば』出版に対して予想をはるかに超える多くの読者からの反響が寄せられたことに驚き、それまでのように園内の機関誌に作品発表することにとどまらず、一般社会の読者に作品を届けようと、新たな文芸誌を1958年に創刊するに至った。島の代名詞ともいえる『火山地帯』がそれである。島は鶴見の誘いで、『火山地帯』の歴史を『思想の科学』に発表している⁽⁹⁾。

『火山地帯』を舞台に、島は小説や評論を書きつづけ、晩年に至ってはらい予防法体制の見直しと、国の責任を明確にすべしとの主張を鮮明に打ち出してゆく。原告の1人として国賠訴訟を提起する直前に出された評論集『国の責任』（篠原睦治との共著、社会評論社、1998年）には、40年以上ぶりに鶴見が解説を寄せた⁽¹⁰⁾。

晩年まで関係が継続した稀有な交流の軌跡を、ここに見ることができる。

5. 志樹逸馬との出会いから

志樹逸馬（1917-1959）は、鶴見俊輔によってしばしば「友人」と紹介される入所者である。

志樹は、13歳でハンセン病を発症し、1928年全生病院（のちの多磨全生園）に入院。1933年長島愛生園に転園。生前、詩集はなかったが、死後、原田憲雄・原田禹雄編『志樹逸馬詩集』（方向社、1960年）、『島の四季』（編集工房ノア、1984年）、若松英輔編『新編・志樹逸馬詩集』（亜紀書房、2020年）が編まれた。

講演中、鶴見は志樹の詩「種子」と「闇」を朗読し、次のようにコメントしている。

「ここから〔詩「種子」から⁽¹¹⁾〕、大江満雄は『いのちの芽』というタイトルをとってますね。大江満雄と志樹逸馬は、詩人として親縁関係にありますね。「こういう詩から、大江満雄は、療養所の外にいて、影響を受けていますね」。

ややもすると「大江満雄はハンセン病患者に詩の指導をした」というような、指導する者とされる者の役割を固定的にとらえる見方がなされがちだが、大江の側もまた影響を受けているという指摘は重要である。

鶴見は、1954年、1956年と志樹逸馬に会うため長島愛生園を訪れ、志樹没後の1960年には志樹の墓参を兼ねて同園を訪問している。

その間、志樹は鶴見のすすめで、「病人 西木延作の生活と思想」⁽¹²⁾、「看護婦牧野ふみの記録」⁽¹³⁾、「いかに生きるか」⁽¹⁴⁾などのエッセイを発表している。志樹没後には志樹逸馬夫人の志樹治代「私の夫の生涯」が『思想の科学』に掲載された⁽¹⁵⁾。

一方、鶴見も「若い友の肖像」を書いて、志樹逸馬の人となりを一般社会の読者に紹介している⁽¹⁶⁾。

志樹の死によって両者の交友は早くに途絶えたが、その関係は大変密なものがあった。

鶴見は、講演の中で、志樹逸馬は少年時代から療養所に入所し、先輩から文学の手ほどきを受けて詩作を始め、インドの詩人・タゴールの作品から影響を受けるなど独自の学びの場があったことを指摘する。タゴールは、日本の覇権主義を批判したことを理由に日本の文壇からは冷遇されたが、ハンセン病療養所という閉鎖空間がかえって、文壇の流行に左右されない文学の伝承の場とな

(8) 鶴見俊輔「島比呂志の世界」（島比呂志『生きてあれば』大日本雄弁会講談社、1957年）232頁。

(9) 島比呂志「『火山地帯』の歴史」（『思想の科学』第4次、第15号、中央公論社、1960年3月）11-16頁。

(10) 鶴見俊輔「解説」（島比呂志・篠原睦治『国の責任』社会評論社、1998年）205-207頁。

(11) 正確には、『いのちの芽』に「種子」は掲載されていない。ただし、「芽」という作品や、「新しい生命よ芽生えないか」という詩句を含む「癩者」という作品など、鶴見の指摘に合致するような志樹の作品が『いのちの芽』には見られる。

(12) 志樹逸馬「病人 西木延作の生活と思想」（『中央公論』第69巻第6号、中央公論社、1954年6月）214-219頁。

(13) 志樹逸馬「看護婦牧野ふみの記録」（『新女苑』第18巻第10号、実業之日本社、1954年10月）89-95頁。

(14) 志樹逸馬「いかに生きるか」（『思想の科学 会報』第20号、思想の科学研究会、1958年1月20日）35-44頁。

(15) 志樹治代「私の夫の生涯」（『思想の科学』第5次、第39号、思想の科学社、1965年6月）113-119頁。

(16) 鶴見俊輔「若い友の肖像」（『婦人公論』第40巻題1号、中央公論社、1955年1月）289-291頁。

り、志樹逸馬の文学を育む条件を備えていたとする見方を提示している。今後、療養所のサークル論を考えるうえで示唆に富む視点であろう⁽¹⁷⁾。

6. 島田等との出会いから

鶴見俊輔が最後に取り上げているのが島田等(1926-1995)である。

島田は、1947年長島愛生園入所。1964年「らい詩人集団」結成。詩集に『返礼』(私家版、1992年)、『次の冬』(論楽社、1994年)。評論集に『病棄て：思想としての隔離』(ゆみる出版、1985年)がある。

島田は、文章を書くようになった経緯を次のように述べている。

「私が文章を書くようになったのは、長島愛生園の文芸協会の中に評論部会ができた(一九五三年)あとからである。評論部会は発足当初から鶴見俊輔さんの指導を受けてきた。鶴見さんの選評に“乗せられて”書き続けた者も何人かいたと思うが、私もその一人である」⁽¹⁸⁾。

ここで述べられているように、鶴見は1955年11月～1969年1月にかけて長島愛生園の機関誌『愛生』と、1956年5月～1972年10月にかけて長島愛生園盲人会の機関誌『点字愛生』の評論の選者をつとめている。鶴見の選によって採用された島田の論文は以下のとおりである(根来育は島田等の筆名)。

- ・根来育「感情」(第一位)⁽¹⁹⁾。
- ・根来育「〈転換期〉という意味」⁽²⁰⁾。
- ・根来育「打ち込まれたままの杭」⁽²¹⁾。
- ・根来育「コミュニケーションと創造」(佳

作)⁽²²⁾。

・しまだ・ひとし「強いられた問い」(入選)⁽²³⁾。

文章家としての島田は、鶴見による選と選評によって見いだされたと言える⁽²⁴⁾。

また、島田は詩人としての顔も持っていた。1964年には「らい詩人集団」を結成して、全国のハンセン病療養所の詩人たちとともに、「らいとの対決」を主題に掲げた。それまで療養所で生み出された詩が、「らいとの対決において不十分であり、無力であった」という自覚に立つものであった⁽²⁵⁾。

講演会では、島田の詩「非転向」が朗読され、鶴見は次のようにコメントしている。

「好景気とバブルのなかで、日本の国民の理想はふやけてるでしょう。そのことについて、はっきり標準を定めて、この詩は書かれていますね。／ですから、私個人がした仕事に対して、非常に強い刺激を、まったく違うところから与えている。私を、研究者としての領域において叱咤鼓舞する仕事〔詩〕なんです」。

ここで言う「私個人がした仕事」とは、思想の科学研究会を通してなされた共同研究「転向」を指している⁽²⁶⁾。

「同情」というかたちでしか語られることの少ないハンセン病をめぐる日本人の心理的土壌と闘い、生涯にわたってハンセン病問題の解決を求めて論じ続け、詩をつづった島田等の不屈の精神の発露を、「非転向」という詩作品から受け取ることができであろう。

(17) この点について、療養所という隔離政策の被害の現場を肯定的に評価することなどできないとして、島田等は鶴見俊輔を批判している。島田等「隔離の生産性 鶴見俊輔氏への異論」(『裸形』第15号、長島詩話会、1961年3月)16-19頁。また、鶴見・志樹の関係性についての批判的な考察として、前掲、宮下祥子「鶴見俊輔のハンセン病者との関わりにみる思想—1953～1964年を中心に」も参照のこと。

(18) 島田等「あとがき」『病棄て：思想としての隔離』(ゆみる出版、1985年)228頁。

(19) 根来育「感情」(『愛生』第12巻第12号、長島愛生園慰安会、1958年11月)4-11頁。

(20) 根来育「〈転換期〉という意味」(『愛生』第13巻第11号、長島愛生園慰安会、1959年11月)4-13頁。

(21) 根来育「打ち込まれたままの杭」(『愛生』第14巻第10号、長島愛生園慰安会、1960年10月)5-9頁。

(22) 根来育「コミュニケーションと創造」は、鶴見俊輔「選評」(『愛生』第15巻第11号、長島愛生園慰安会、1961年11月)71頁に言及があり、掲載は『愛生』(第16巻第1号、長島愛生園慰安会、1962年1月)18-21頁。

(23) しまだ・ひとし「強いられた問い」(『愛生』第23巻第1号、長島愛生園慰安会、1969年1月)5-10頁。

(24) 鶴見によって見いだされた書き手として、もう一人、森田竹次がいる。鶴見の誘いで、森田竹次は「世の果ての闘い—ハンセン氏病患者の問題について」(『思想の科学』第4次、第3号、中央公論社、1959年3月)8-14頁を発表している。

(25) らい詩人集団「宣言」(『らい』創刊号、らい詩人集団、1964年9月)。

(26) 思想の科学研究会編『共同研究 転向』全3巻(平凡社、1959-1962年)。

7. 晩年の仕事

鶴見俊輔は、晩年に至ってもハンセン病問題への発言をつづけ、実際にいくつかの仕事を成し遂げている。

一つは、自らが関わった交流の家建設運動について、当時学生^{きむらせいや}の1人であった木村聖哉との共著で、証言記録をのこしたことである⁽²⁷⁾。これによって、ハンセン病問題に関心を持つコアな層だけでなく、一般の読者層にも、鶴見によるハンセン病問題との関わりが知られるようになったのである。

さらに二つ目に、ハンセン病問題をテーマに二つの重要な講演をしている。ひとつは、1996年11月30日、らい予防法廃止記念フォーラムでの講演「内にある声と遠い声」⁽²⁸⁾。もうひとつが、今回掲載した、2001年7月1日、高松宮記念ハンセン病資料館開館8周年記念の講演「ハンセン病との出逢いから」である。1996年のらい予防法の廃止と、2001年の国賠訴訟判決確定という、日本のハンセン病問題史における2つの節目に合わせて講演を行ったことになる。それらは、はからずも当時の状況を伝える貴重な記録ともなっている。

そして三つ目に『ハンセン病文学全集』全10巻（皓星社、2002～2010年）の編集委員の仕事を引き

き受けたことである。このうち、記録・随筆と児童作品の巻には解説を寄せている⁽²⁹⁾。あまり知られることのなかった、ハンセン病文学の主要な書き手たちの作品が、このようにして社会に広く示される基礎をつくったのも、鶴見晩年の大きな仕事のひとつであった。

おわりに

以上、見てきたとおり、鶴見俊輔は、戦後まもなくから晩年まで長きにわたってハンセン病問題と取り組んできた。

現在開催されている企画展「ハンセン病文学の新生面 『いのちの芽』の詩人たち」では、大江満雄とハンセン病詩人の関係性に焦点を当てるにとどまったが、療養所の外部からハンセン病問題に接近した文学者や知識人は少なくなかった。鶴見もまた、ハンセン病療養所入所者との出会いをきっかけに、多くの思索を重ねた一人であることが、本講演記録からも明らかになるであろう。

鶴見が親交を持った入所者の多くは詩人であった。講演で言及された詩人たちはみな、それぞれに個性的な生の軌跡を描き、多くの作品をのこしている。本講演記録が、それらの詩人たちの作品との出会いのきっかけとなることを願っている。

(27) 鶴見俊輔「五十年・九十年・五千年」（木村聖哉・鶴見俊輔『「むすびの家」物語：ワークキャンプに賭けた青春群像』岩波書店、1997年）159-241頁。

(28) 鶴見俊輔「内にある声と遠い声」（『らい予防法廃止記念フォーラム報告集～排除から共生への架け橋～』FIWC関西委員会、1998年）15-29頁。

(29) 鶴見俊輔「解説」（『ハンセン病文学全集4 記録・随筆』皓星社、2003年）761-772頁。鶴見俊輔「解説」（『ハンセン病文学全集10 児童作品』皓星社、2006年）439-445頁。

2001年10月1日

高松宮記念ハンセン病資料館

第33号 (季刊)

資料館八周年記念講演

鶴見先生の話に感銘

ハンセン病資料館は今年の六月二十五日で満八周年を迎えた。入館者は今まで一日平均四十人であったが国賠訴訟熊本地裁判決、政府の控訴断念に対するマスコミの度重なる報道に、国民のハンセン病に対する関心が急速に高まり、七月、八月の入館者は一日平均八十人前後で倍増となった。資料館では七月一日、多磨全生園コミュニティセンターにおいて八周年記念講演会、講師・鶴見俊輔先生の「ハンセン病との出会いから」を開催した。

当日は地元、近郊各都市をはじめ、神奈川、埼玉、千葉、栃木、福島、岐阜、和歌山、佐賀、熊本など遠方からの参加者も多く、会場は四百二十人を超す満員の盛況であった。

成田運営委員長の司会で、大谷館長の挨拶があり、つづいて鶴見先生は「私とハンセン病との出会いは終戦後、東京でロシア(米国籍)の一少年の通訳をしてあげることから始まった」と語り、その後その少年(トロチエフ)が叔母と栗生楽泉園に入園、私が栗生楽泉園

を訪れ交際する中で、矢嶋良一(元栗生楽泉園園長元多磨全生園園長)や大江満雄(詩人)、入院者の笹雄二(栗生)・島田等(長島)・志木逸馬(多磨)などとも知り合いになったことを終始ユーモアを交えて語り会場の人たちに感銘を与えた。講演終了後会場の人との質疑応答があり三時三十分終了した。



満員の聴衆を前に講演する鶴見先生

資料①

「資料館八周年記念講演／鶴見先生の話に感銘」(『資料館だより』第33号、2001年10月1日) 2頁。